

牧師室から (2021.6.20)

ステレオタイプに言うのも憚られるが、小生の生まれである千葉県は、比較的温暖で自然にも恵まれているので、政治や思想などにおいて傑出した人物が出にくいと言われることがある。そのような中で、国木田独歩は数少ない同郷の文学者である（あまり長いこと千葉にはいなかったが）。彼は青年時代に植村正久から薫陶を受け、受洗している。彼の作品の中で『忘れ得ぬ人々』というのがあるが、その鋭い視点が窺える。

私共にはそれぞれ、恩師、友人など自身と深いかわりを持つ人物がいるはずである。だが言ってみればそのような人たちは、確かに「忘れえぬ人」であることもあるが、むしろ「忘れてはならぬ人」であろう。しかしそれとは別に、名も知らぬ、例えば旅先において一期一会で出会った人、或いはふと立寄った店の店員さんの一言や、目線、しぐさなどが、ありありと脳裏に焼き付いていることがある。

マルコによる福音書にはイエス様が逮捕されて、連行されていくときに、名も記されていない一人の若者がついて行ったが、捕まりそうになると、着ていたものを捨てて裸で逃げた、という実に短いエピソード（14章 51,52節）がある。ところが自分の中ではこの場面がリアルに思い描かれて、印象深いのが不思議なのである。他の記事に比べると、この出来事がここに挿入されているのが唐突な感じである。しかし小生の頭の中では鮮明なイメージとして焼き付いているのはなぜだろうと以前よりずっと考えている。皆さんにはそのような経験はないでしょうか。

(鈴木淳一牧師)